

〈送信者〉

財団法人 四万十川財団

TEL : 0880-29-0200

FAX : 0880-29-0201

E-mail: office@shimanto.or.jp

URL:<http://www.shimanto.or.jp>

四万十川産 スジアオノリを守るために。=四万十川河口域=

清流通信読者の皆様こんにちは。

今回は四万十市より、スジアオノリの調査に関わる高知大学海洋植物学研究室、平岡雅規准教授についてお伝えします。

四万十川の“天然スジアオノリ”

数多くの生きものたちを育み、流域の人々の生活を潤してきた豊かな川、四万十川。その四万十川の“幸”として知られる“アオノリ・アオサノリ”。特に、冬から春にかけ、海水・淡水の混ざり合う汽水域に生育する“四万十川天然スジアオノリ”は、その味・香りともに最高級品と謳われ、地域の重要な水産資源となっている。しかし、近年その収穫量は激減している。

平成19年6月、四万十市と高知大学は相互に連携し、地域の活性化と振興に寄与することを目的とした連携協定を締結。その事業として、近年漁獲量が減少している四万十川の“スジアオノリ”“天然アユ”に関する調査研究を始めた。

海水温度とスジアオノリ

7月中旬の午前9時半、午前中からジリジリと真夏の熱い太陽が照りつける。

「朝の調査はいつも6時からですが、今回は早くて、朝5時からでした。」待ち合わせの場所、四万十市役所駐車場に現れた、高知大学海洋植物学研究室の平岡雅規准教授は、既に早朝1回目の調査を終えていた。

スジアオノリの調査研究に携わる平岡先生は、月に一度のペースで四万十川スジアオノリ生育地の水質調査に四万十市を訪れる。潮の満ち引きが最大になる大潮時に、海水温、pHなどの“スジアオノリ生育環境調査”をするためだ。

「調査は4年目に入っているのですが、うち豊漁が1年、不漁が3年。そこでデータから、不漁の年は海水温が高いことがわかっています。フィールド調査と共に、研究室でも生育実験をしているのですが、水温が20~25℃くらいになると、スジアオノリは体の一部が胞子化して、上に伸びなくなる。温度が高いと胞子がばらまかれ、個体数は多くなるが、一つ一つの個体は短くて収穫できないのです。」

私たちが通常食すスジアオノリは、その名の通りにスジ状で長い。しかし、アオノリは暖かいと藻体の先端に多くの胞子を造って放出するらしい。先端部分がどんどん胞子になって消えていくので、藻体が長くならない。それ故、収穫ができないのだという。

スジアオノリの安定生産を目指して

「和歌山県南部に古座川という川が流れている、ここでも天然スジアオノリが採れます。そして、和歌山県沖は黒潮が流れているので、珊瑚などの植生が高知県とよく似ている。でも、四万十川河口と古座川河口とは直線距離でも300km近く離れています。ところが、過去のデータを調べてみたら、驚くべきことに、二つの川のスジアオノリの生産量推移がほぼ一致しているのです。これはスジアオノリが、“川”よりも“海”つまり“黒潮”的影響を大きく受けているのではないかと…」遠く離れた和歌山でも同様の現象があることに、地球の大きなを感じ、思わずソクッとした。



昭和50年代には年間50トン以上の収穫があった四万十川のスジアオノリ。
それが徐々に減少し、近年は3トンを割り込み、今年はついに2トン以下になった。

「地域の重要な産業としてのスジアオノリは、“安定生産”ということが重要だと思います。安定生産することにより、販路も拡大するし、用途も増大する可能性がある。今年のように過去最低の1トン台だと、来年以降の販路にも影響が出かねない。しかしそこには、“海水温度”という制御できないところでの問題が横たわる。温暖化が進む昨今、自然を相手にやることは非常にリスクが大きい。そこで、天然物だけでなく、地下水を使った陸上養殖の研究も続けています。うまくいけば、安定供給の道が開ける。既に昨年からは、四万十市の建設業者が地下海水を使ったスジアオノリの陸上栽培に取り組み始めています。」

藻類の生態、四万十川スジアオノリのこと

海産藻類といえば、食卓に上るワカメ・昆布・ヒジキぐらいしか知らない私は、その生態など知る由もないのだが、この機会にと、平岡先生にいろいろ伺った。

平岡先生は、大学の学部では陸上植物の生理学、生長とか発生とかの研究をして卒論を書かれたという。「陸上植物は形が複雑です。それに比べ、藻類は大きくて形が単純、海藻は丸い形とかごくシンプルです。アオサなどは一枚ですから、そういうところに惹かれたのかもしれませんですね。」

そしてその後、大学院で海藻の研究を始めた。「もともとは、アオサの研究をしていました。このあたりで言う“アオサ”は、ヒトエグサというものなんですが、それではなくて“正式名のアオサ”です。アオサは一枚の単純な形ですが、生殖のときは体が胞子になる。海藻は体の一部が生殖細胞に変わっていくのがおもしろい。割と単純な仕組みで子どもを生み出していくのです。人間の場合は生殖細胞と体の細胞は切り離されていて、女性は生まれながらに卵子を持ってこの世に生まれ出る。だから、今、何かと問題になっている放射能汚染でも、女の子が放射線を浴びるリスクは、その代だけに止まらず子孫にまで及ぶということなのです。」

なるほど、あらためて、その重大な問題性に気付く。

「生物学の大きな研究テーマに、有性生殖、無性生殖のことがあります。人間には無性生殖の選択肢はない。つまり有性生殖のみですが、海藻は、有性生殖か、クローンのように無性で増やしていくという、二つの選択肢を持つのです。」

「そして、最近の研究によってわかったことですが、四万十川のスジアオノリは、有性生殖をおこなう株と無性生殖のみおこなう株があり、それら有性株と無性株の分布は異なっています。なぜそのような分布の違いが生じるのかを、生理学的および生態学的なアプローチによって解析を進めていて、そのことがスジアオノリの収穫量を上げることにつながる可能性があるのではと思っています。」

平岡先生は、スゴイ発見を淡々と話してくださった。

「今は、産業との関わりで要請があってここにいますが、それぬきで研究自体は進めています。四万十川は学術的にも大変おもしろい場所だと思うのです。」



今回、調査に同行させていただきスジアオノリの話を伺いながら、四万十川とそれが育む命の不思議さに、あらためて感動を覚えた。今まで“お好み焼きのトッピング”くらいにしか考えていなかったスジアオノリだが、なにやら急に、愛おしくすら思えてきて、これからはありがたくいただかなければと思い直した。

そして、この豊かな川を未来に引き継ぐのは、他でもない私たちの責任なのだと感じながら、暑い夏の四万十市を後にした。

